

語 源 再 考

—辞典等に見る語源説明をめぐって—

(4)

河 野 庸 二

緒論に代えて

John Ciardi: *A Second Browser's Dictionary* について

前回までに発表した拙稿「語源再考」(2)および(3)の中で筆者が再三引用してきたアメリカの語源辞書、John Ciardi の *A Browser's Dictionary*(1980) はかなりの好評を博したようである。もっとも、この判断はこのほど出版された同書の続編、*A Second Browser's Dictionary* の dust cover の折り返えしに刷り込まれた宣伝文によっている。いわゆる 'blurb' 特有の誇大広告的なところがあるかもしれないが、その冒頭は次のとおりである。

In the past three years some forty thousand people have bought, read, re-read and read aloud (i.e. have browsed) John Ciardi's *A Browser's Dictionary*—to their undimmed delight and endless edification.

初編の好評に気をよくした著者が、まさに乗りに乗って書き上げたかとも思える「第2編」は、初編とほぼ同じ体裁の本で、新項目を ABC 順に掲載しているが、巻末には Supplement として、初編で扱った一部の項目についてのその後の研究による補足、補正を併載している。このことからもしゅうぶんに察せられるように、第2編においては、語源学者としての著者の取り組み方が一段と本格的になってきた感が深いのであるが、同時にまた、辛らつきの点でも、初編には見られない手きびしさの感じられる記述が随所に見られるのである。まず目立つのは著者がわざわざ *spook etymology* なる一項を設けてその定義づけを行い、いわゆる *spook etymologist* たちの所業を容赦なくこきおろしていることである。

In these notes, I use this term to label etymologies invented by

language spooks who thrive on free association with no regard for attestation. (An alternative term might have been “guess etymology.”) Spook etymologists have long haunted the language, and have been shamelessly ingenious in making up nonfacts in support of their inventions¹. . .

さらに同じ項のおわりに、著者はこの「幽霊語源説」が民俗語源説と混同さるべきでないことを念を押している。

Spook etymology is not to be confused with folk etymology, the common and often poetic process . . .¹

そしてチアルディは事実同書の幾多の項目で旧来の語源説を槍玉に上げているが、テニス用語としての ‘love’ を扱った項などはその最たるものといえよう。

love In tennis. Zero, No score, [A simple and undramatic extention from *love* with the sense “nothing.” So *all for love, not for love nor money, love’s labor lost.*]

HISTORIC. A common spook etymology asserts this term to be from Fr. *l’oeuf*, the egg, prob. by association with Am. slang *goose egg* for “zero.” But French has never used *egg* in this sense. . . (中略) . . . The spook etymology is perhaps a bit more dramatic than the true one, and pretends to a more learned awareness of language, but spook etymologists always prefer drama and false learning to the truth¹.

Ciardi の指摘するとおり、たしかに真説はわかってみれば案外あっけないものなのかもしれない。*grapefruit* の項もチアルディの語気の鋭さに圧倒される点では同様である。

. . . [The name is from a persisting error. Some, including NWP, explain it by the “fact” that the fruit grows in grape-like clusters—one of those errors clerk-lexicographers borrow from earlier clerks.

I have owned grapefruit trees and must insist that not even the crudest sense of metaphor could conceive the fruit to grow in grape-like clusters¹.

いったん定説ができあがってしまうと、それを白紙に戻して新たに考え直す人がでてこない限り、恒久的に定説として踏襲されていくのも事実である。その好例として植物学者中村浩氏の遺著の1つである「園芸植物名の由来」から「シクラメンは旋回する花」の一節を引用する。

シクラメンという言葉は、ラテン語の“旋回する”という意味で、英語のサイクル (cycle) と同じ意味である。シクラメンがなぜ“旋回する”という呼び名をもっているかということについては、従来、その円形の塊茎によるとされていた。牧野博士の図鑑にもそのように説明されている。

しかし、近時、園芸がさかんになると、野生種のシクラメンも輸入されるようになり、栽培品種のように立派ではないが、小形でつつましい野趣が愛好され、鉢植などにされて観賞されるようになった。この野生種のシクラメンは、つぼみが立つようになると、その花茎がらせん形にねじれてくる。開花してもらせん形にねじれた花茎が目立つ。これを見るとシクラメンが“旋回する”という意味をもつことがよく了解される。シクラメンという名は、塊茎が円形だからではなく、花茎が旋回することによるのは明らかである²。

たしかに内外のあらゆる辞典が ‘cyclamen’ の語源をその塊茎の形によるとしているのは事実である。中村氏の新説をそのままのみにするのは問題だとしても、ことにこの種の単語の場合、原種あるいは野生種にまでさかのぼって語源を考うべきものであるから、同氏の説がかなり有力であることは否めないであろう。要するに語源学においては実証性が何よりも重視されるべきである。さればこそチアルディも ‘grapefruit’ の項でさらに語をついで次のように記しているのである。

In 1814 the botanist John Luhan, in his Hortus Jamaicensis (The Garden of Jamaica), mentioned a variety of this fruit that tasted like grapes. Perhaps. Or perhaps Luhan's taste buds were addled. In any case, *grapefruit* came off his tongue and into ours.}]¹

「グレープフルーツ」の場合、「その実がブドウの房状に鈴なりになる事実による」という定説に対して、Ciardi は実際に自分で栽培した経験を通して、それを全く根拠のない俗説としてしりぞけて、「ブドウに似た味のするこの果実の一品種」のことを記した古文書を明示することによって自分の主張を実践しているのである。「ことによるとそんな味の品種が実際存在したのかもしれない。あるいは彼の舌が狂っていたのかもしれない。いずれにしても、グレープフルーツの名はその味による。」という断定のしかたはチアルディならではのものといえよう。

A *Second Browser's Dictionary* で気がかりなのは、論敵に対する個人攻撃とおぼしい露骨な態度が散見することである。同書の *homely* の項にはそれが著しい。

1. Plain, unattractive, ugly. *Isaac Asimov is the homeliest man in town, or in any three or four towns you care to mention.* 2. Crude, homespun, inelegant. *Only his wit is homelier than he.* [But up to XV with the sense “secret.” <Ger. heimlich, which labels a “home” (family) matter not to be discussed abroad. Also, earlier, *be homely with*, to be on intimate terms with. *To be homely with Isaac is to shine by comparison.*]¹

以上は同項の全文であるが、語意の変遷を illustrate するために上げた例文3つがことごとく Isaac Asimov を愚弄した内容になっているのには恐れ入る。しかもチアルディとアジモフはかの *The Random House Dictionary* の contributor として共に名を連ねている間柄なのである。いわば同僚ともいうべき相手をやり玉に上げて「アイザック・アジモフはどこにもそうざらにない醜悪な男だ。」「だが彼の知性は彼以上に粗野である。」「アイザックと近づきになれば相手が相手だけにこちらが偉く見えてくる。」などとさんざんにくさしている。*Words from History*, *Words on the Map*, *Words of Science* 等々、持ち前の該博な知識と作家的才能を駆使してことばの由来に関する著書を何冊も物しているアジモフは、あくまでも実証主義を主張するチアルディとは馬が合わないのであらうか。ともあれかの Dr. Samuel Johnson がその英語辞典の ‘oats’ の項で露骨に主観的態度を見せた時以来の伝統が根強く残っているのを痛感した。

smog

「スモッグ」は今や我が国においても完全に常識化した感があるが、この単語の生いたちについて説明らしい説明を載せている辞書は意外に少い。たいていの国語辞典、内外の英語辞典は、この語が ‘smoke’ と ‘fog’ からの混成語であることを記すにとどまって、いつ、どこで、どのようにして生まれた語であるかという点には全くふれていないのである。かろうじてさがし当てた4冊の本の記述にもそれぞれ一長一短があって、しかも内容的に大きくく違っているといわざるを得ない。まず研究社の大英和では、年代を明記しているのが大きな特長である。

【((1905))((混成)) ← SM(OKE) + (F)OG!】³

一方、外来語語源辞典（角川小辞典）は、この語が英国起源であると明言している。

〔参考〕 (A)20世紀初頭、英国で考案された合成語。日本で一般に使われるようになったのは昭和37年（1962）ごろから⁴。

ところがアジモフは、学術語の由来を解説した著書 *Words of Science* の中の *Cumulus*（積雲）の項で、さまざまな大気現象を取りあげながら ‘smog’ に言及して次のように書いている。

... In some industrial areas, such as Los Angeles, smoke may mix with a persistent fog, and a combination word, *smog* (*smoke-fog*) has been invented to describe this, and popularized by Hollywood comedians⁵.

もっともアジモフの記述は、正面きって ‘smog’ を論じたものではないのでいくぶん簡略的である点は否めないが、少くともこの一節を読んだ限りではこの単語の発祥の地は **Los-Angeles** としか考えられないのではないか。ロスとハリウッドの位置関係からも、そう解釈するのがいちばん妥当である。これに対してモリスの辞書は次のような説を載せている。

smog, a blend of “smoke” and “fog,” was, according to one ac-

count, invented by Hubbard Keavy, one-time Associated Press news executive. When he worked on the *Des Moines Tribune* in 1923 the city was virtually under siege in winter by polluted air caused by heavy burning of soft coal and fog rising from the river. He wrote a headline involving “smoke” and “fog” for a front-page story but it would not fit into the space allowed. So, out of desperation or inspiration, he wrote this head. SMOG HITS/CITY ANEW. The managing editor called it a monstrosity, but the public seemed to approve⁶.

例によってモリス夫妻の記述は話としてはまことにおもしろいのだが、この点著者自身も「一説によれば」とことわっているように、問題はやはり *attestation* が得られるか否かであろう。それにしても詳細にわたるいかにもまことしやかな説ではある。「デモイン」はデモイン川にのぞむアイオワ州の州都であるが、「1923年」といえばもはや「20世紀初頭」とはいえない。第1面に「スモッグまたも/市を襲う」という見出しのある、当日の「デモイン・トリビューン」紙が見つからない限り、この語源説もチアルディあたりから ‘spook etymology’ として一笑に附されることは必定である。

jeep

第2次大戦中米軍の軍用車として大活躍し戦後の日本にも進駐軍と共にはなばなしく登場したかのジープも、アメリカではついにお払い箱になったと聞く。jeep の語源はたいていの辞典類が載せていて、その記述内容は大同小異といえるものなので、併せて読むならば大体真相を把握することができる。

[G.P. (general purpose vehicle) の発音を移すと同時に、漫画 Popeye に出る架空の小動物の *jeep* という鳴き声を利用したといわれる] (小学館英和中辞典)⁷

【((1941))((もと軍俗) ← ? *Eugene the Jeep*: E.C. Segar (1894—1938) の漫画 Popeye 中の ‘jeep’ という奇声を出す架空の小動物の名、のち G.P. (=General Purpose Car) と連想された】(研究社大英和)³

[Military slang from G.P. for General Purpose (vehicle); the form perhaps influ. by the comic strip *Eugene the Jeep* by E.C. Segar, 1894-1938. Eugene, a comical animal, regularly made a sound ballooned as “Jeep!”] (Ciardi)⁸

jeep is generally believed to have developed from the letters GP (for “general purpose”), used by the army as the code designation for this vehicle. Undoubtedly its immediate widespread acceptance can be credited in large part to the popularity of a comic strip character, Eugene the Jeep, a tiny creature with supernatural powers, created by the late E.C. Segar, a cartoonist syndicated in the years before World War II. (Morris)⁶

... From the Army term “GP” [general purpose] reinforced by the noise “jeep” made by a mythical animal who could do almost anything, in E.C. Segar’s comic strip, “Popeye.” c 1938.

(*The Pocket Dictionary of American Slang*)⁹

ここで注目したいのはモリスの辞書にある ‘a tiny creature with supernatural power’ およびアメリカ俗語辞典にある ‘a mythical animal who could do almost anything’ というくだりである。いずれもうっかりすると見落としそうな何気ない一節であるが、「たいていのことなら何でもできる」という特性こそまさに四輪駆動の万能軍用車と、ポパイ漫画に登場する超能力をもつ小動物との何よりの共通点なのである。したがって単に万能車の略号 GP と漫画のキャラクターの発する奇声とが結びついたとする語源説明は片手落ちではないか。併せて「超能力的」という両者のもつ共通点にも言及して、語源がこの点からも reinforce された可能性を示唆することが望ましく思われるのである。

ジープに関連して述べると、アメリカのエンサイクロペディア類は漫画家にも相当のページ数を費やすものであるが、ポパイの生みの親である E.C. Segar の項を設けているものは全く見当たらない。つまり作者自身よりも Popeyeの方がはるかに有名になっているためであろうが、そのポパイについては小学館の最近英米情報辞典にかなり詳細な解説がある。

米国の漫画家 E.C. Segar によって1929年に生みだされた新聞マンガの

キャラクターで、怪力無双の船乗り、いつもコーンパイプを顔のむこう側にくわえている。恋人の Olive Oyl は彼より前に漫画に登場していた；映画では1933年に Max Fleischer 製作の Betty Boop の短編アニメーションのなかで初めて登場、ホーレン草を食べて強くなるギャグは漫画映画から生まれた¹⁰。

また Eugene the Jeep に関しては昭和56年に出たサンケイ出版の「ジープ」の中に詳しい。あいにく訳本であるがまさに「ジープのすべて」と呼ぶにふさわしい内容の本である。同書によればシーガーは1936年、

ポパイの漫画に「ユージン・ザ・ジープ」という名札を貼った謎の箱をだして、SF 的な味わいをもたせた。この箱はオリーブ・オイルへの贈り物で、もちろんオリーブはこの漫画の女主人公であり、ポパイのガールフレンドである。

この箱は4月1日に開けることになっており、読者はこの日を待っていた。その日になって、ユージン・ザ・ジープが現われた。これは小さな犬くらいの動物で、後ろ足で立っていた。彼はアフリカ生まれということで、オーキッドというラン科の植物を主食にしていた。

ユージンの面白いところは、超能力をもっていることであった。彼は次元の間を行ったり来たりすることができ、四次元の世界にいる時は三次元の世界にいる人には見えないのであった。…¹¹

同書はさらに当の Eugene the Jeep の登場する場面を2葉併載している。いずれにしてもこの本は「ジープ」さらには「ユージン・ザ・ジープ」に関する情報源としては最高のものといえよう。Eugene the Jeep の名が GP と結びつくためのもう一つの要因はその時期であつたろう。その点でもモリス夫妻の ‘created by the late E.C. Segar, a cartoonist syndicated in the years before World War II.’ はそつがないといえる。つまりこのキャラクターの登場とこの軍用車の活躍は相前後していたのである。

guillotine と silhouette

「ギロチンは自分の発明した断頭台の上で死んだ」などという全く根も葉もない俗説がまことしやかに行われていたものである。第一 Guillotin の日

本語による表記は「ギロチン」とはならない。ところで、この種の俗説がわが国だけのものでないことは、次に引用する Asimov の記述からも明らかである。

A legend is sometimes repeated that Guillotin was himself “guillotined.” He survived the Reign of Terror by 21 years and died in his bed at the age of 76¹².

ギヨタンとギロチンにまつわる真実に関しては Americana の GUILLOTIN およびそれにつく GUILLOTINE の項に詳説されている。

...The instrument designed to carry out his suggestions was subsequently named for him (see GUILLOTINE), though he strongly objected to the use of his name¹³.

In 1791, the Legislation Committee of the National Assembly requested that Dr. Antoine Louis (1723-1792), a surgeon, design a decapitation machine of the kind proposed by Dr. Guillotin. Dr. Louis' design, as presented on March 7, 1792, was approved, built, tested on sheep, and adopted on March 20, 1792, with the name *louisette*. The next month, on April 25, it functioned officially for the first time, decapitating a highwayman. Neither the name *louisette* nor the similar *louison* caught on, however, and the word *guillotine*, used in a journal shortly thereafter, became its popular and official name¹³.

ギヨタンの略伝やギロチンの前身に当たる斬首機械に関する詳細な解説を省いてもこのように長くなる。要するにギヨタンは提唱者であって考案者ではない。ところが現行の辞典類の中にはあい変わらず旧来の説を踏襲するものが結構多いのである。

〔参考〕 フランス革命時代にギヨタン (J.I. Guillotin) が考案¹⁴。

考案者の医者ギヨタン (Joseph-Ignace Guillotin) の名から。〔参考〕④ (略)。⑤最初にギロチンにかけられた (1792年4月25日) のはペルチエという名の追いはぎ⁴。

ギロチンによる最初の犠牲者名まで記していながら、装置の考案をギョタンに帰しているのは不思議である。

...Invented by Joseph Ignace Guillotin (1738-1814) it was introduced as a method of capital punishment in France in 1792, during the French Revolution¹⁵.

一方クラインの語源辞典ではギョタンはこの装置の考案者であり推賞者であったことになる。

named after the physician Joseph-Ignace Guillotin (1738-1814), who recommended its adoption by the National Convention in 1789. His aim in inventing this machine was to make the execution of those condemned as swift and painless as possible¹⁶.

とはいえ、彼の意図が人道主義に端を発するものであるとうたっている点はさすがである。

ギョタンを考案者とするこれらの本に対して彼を提案者と明記する辞書は一応史実にそったものといえるが、次のようなこっけいも起り得る。American Heritage Dictionary と小学館の英和中辞典を並べてみると

[After Joseph Ignace Guillotin (1738-1814), French doctor who proposed its use.]¹⁷

[ギロチンの使用を提案したフランスの医師 J.I. Guillotin (1738-1814) の名より]⁷

日本語は英文からの訳文であることが一目瞭然である。ところで ‘its’ は「ギロチン」を指すことはたしかなのだが、冒頭から「ギロチンの使用云々」というのはいかにも可笑しい。せめて「この装置の使用云々」であれば無難であったろう。

ちなみに本家本元のフランスの辞典プチ・ラルースは簡潔ながら手際よくかなり詳細にわたる説明文を載せている。

— La guillotine doit son nom au docteur Guillotin, membre de la Constituante, qui proposa de remplacer par la décapitation les sup-

plices alors en usage, et preconisa une machine employée déjà chez les Italiens. La guillotine fonctionna pour la première fois en France le 25 avril 1792¹⁸.

(ギロチンの名は、当時使用されていた拷問を斬首にきりかえることを提案し、すでにイタリア人の中で用いられていた装置を推賞した立法議会の議員である医師ギョタンに由来する。ギロチンはフランスにおいては1792年4月25日に初めて正式に使用された。)

なお、Guillotin という姓は Guillomet, Guillet, Guillotte などと並んで Guillaume (=William) の縮小形である。

silhouette の方は guillotine の場合よりもさらに異説が多い。

(フランス人の政治家ドシルエット Etienne de Silhouette (1709-67) が偶然、全く不適任な要職を与えられ、極端な節約を唱えて、肖像画は黒影で十分だと主張したのに基づく)¹⁹

ドイツの辞書にも同様なことが書いてある。

[nach dem französ. Finanzminister Etienne de Silhouette (170-1767), der die Mode der Porträtierung durch Schattenrisse einfuhrte u. damit aus Sparsamkeitsgrunden die kostspieligen Gemälde u. Miniaturen zu verdrängen suchte]²⁰

(切り絵の影絵による肖像画を流行らせ、節約を理由にそれをもって費用のかかる絵画や細密画に代えようとしたフランスの蔵相エチエンヌ・ド・シルエットの名より)

これに対して American Heritage Dictionary は、「シルエットの蔵相としての在任期間があまりにも短かったため、はかない価値しか持たないものを指すようになった」という独特の解釈を示している。

[French, short for *portrait à la silhouette*, from *silhouette*, object intentionally marred or made incomplete, something of ephemeral value, after Étienne de Silhouette (1709-67), with reference to his evanescent career (March-November 1759) as French controller-general.]¹⁷

ところで *Americana* の記述は例によって詳細であるが、やはりニュアンスの異なったものになっている。

... The name comes from Étienne de Silhouette (1709–1767), French minister of Finance in 1759. He sought by severe economy to replenish a treasury exhausted by war. But his policies became so unpopular that after nine months he was forced to resign. During this period all the fashions in Paris took on the character of parsimony. Coats without folds were worn; snuffboxes were made of plain wood; and, instead of painted portraits, outlines only were drawn or cut in profile. All these fashions were called *à la Silhouette*; but the name survived only in the case of the profiles¹³.

「蔵相シルエットの節約政策のあおりを受けてパリの流行がすべて儉約調のものとなり、それらはすべて『シルエット風』と呼ばれた」としているが、*Columbia Encyclopedia* によれば影絵は政策の影響ではなくたまたま当時の流行だったことになる。

... Silhouettes were inspired by black outline decoration of antique pottery. They became very popular in Europe in the last decades of the 18th cent. and replaced miniature painting at French and German courts. They were also favored in England and America. ...²¹

つまり「古代のつば絵に見られる影絵風の装飾に蝕発されて18世紀の末にヨーロッパで流行し、フランス・ドイツの宮廷ではミニアチュアにとって代わるほどの勢いを示し、英米においても愛好された」といい、その流行は写真が登場するまで続いたとしている。一つしかあり得ない史実が解釈のしかた次第で幾とおりもの変形を生ずるのだとすれば、結局簡潔にして要を得た Klein の説明あたりが最も妥当ということになる。シルエットの政策を最も憎んだのはしめ上げられた貴族階級に他ならなかったであろうから。

named satirically after Étienne de Silhouette, French finance minister (1709–67), who was ridiculed by the nobility for his undue economies¹⁶.

ところでイギリスのことば研究家 Constance Mary Matthews 女史はその著書 *Words Words Words* (1979) の中で guillotine, silhouette の2つの語を対比して、独自の鋭い分析を試みている。

Joseph Guillotin was a kindly doctor who wanted to make capital punishment quick and painless. In contrast Etienne de Silhouette was an unpopular politician whose name was given by his enemies to a new kind of fashionable portraiture to suggest that his plans were mere shadowy outlines with nothing in them. What was meant as an unkind jibe has given him immortality, for his name, being unusual and euphonious, has stuck to this kind of picture and passed to the wider meaning of any object seen against the light. It lives on in a pleasant, artistic atmosphere, while the name of the humane doctor is associated with severity and horror, and is none the better for its frequent metaphorical use in our parliament.²²

つまり、人道主義の立場から処刑をできるだけ苦痛の少ないものにしようとする努力した医師ギョタンが、断頭台に名をとどめて恐怖の連想をぬぐい去ることができないのにひきかえ、シルエットの方は在任中の不人気にもかかわらずその語呂のよさもさいわいして、常に芸術的雰囲気に伴った好ましい語となったという運命の皮肉を巧みに要約している。なお、イギリスでは国会における「討論打ち切り」をも 'guillotine' と称するが、これとても芳しからぬ意味であることにはかわらないと言っている。

注

- 1) John Ciardi, *A Second Browser's Dictionary*, (Harper & Row, 1983)
- 2) 中村 浩, 園芸植物名の由来, (東京書籍, 昭和56年)
- 3) *Kenkyusha's New English-Japanese Dictionary*, (研究社, 1980年)
- 4) 吉沢典男／石綿敏雄, 外来語の語源, (角川書店, 昭和54年)
- 5) Isaac Asimov, *Words of Science* (Houghton Mifflin Company)
- 6) William and Mary Morris, *Morris Dictionary of Word and Phrase Origins*, (Harper & Row, 1980)
- 7) 小学館英和中辞典, (小学館, 昭和55年)
- 8) John Ciardi, *A Browser's Dictionary*, (Harper & Row, 1980)
- 9) *The Pocket Dictionary of American Slang*, (Pocket Books, 1973)
- 10) 最新英語情報辞典 (小学館, 昭和58年)
- 11) デンフェルド・フライ, *ジープ* (サンケイ出版, 昭和56年)
- 12) Isaac Asimov, *Words from History*, (弓書房, 昭和57年)
- 13) *Encyclopedia Americana*, (Grolier, 1966)
- 14) 学研国語大辞典 (学習研究社, 昭和55年)
- 15) *The Macmillan Encyclopedia*, (Macmillan, 1981)
- 16) Ernest Klein, *A Comprehensive Etymological Dictionary*, (Elsevier, 1971)
- 17) *The American Heritage Dictionary* (New College Edition), (American Heritage Publishing Co. 1980)
- 18) *Nouveau Petit Larousse*, (Librairie Larousse, 1968)
- 19) あらかわ・そおべえ, 角川外来語辞典 (第二版) (角川書店, 昭和56年)
- 20) Gerhard Wahrig, *Deutsches Wörterbuch*, (Bertelsmann Lexicon-Verlag, 1975)
- 21) *Columbia Encyclopedia*, (Columbia University Press, 1963)
- 22) Constance Mary Matthews, *Words Words Words*, (Lutterworth Press, 1979)